

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23531167

研究課題名(和文)「知識基盤社会」に至る国語科の転換とそれを踏まえた言語活動の授業作りに関する研究

研究課題名(英文)Class development of language arts in the knowledge-based society

研究代表者

高木 まさき (Takagi, Masaki)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：40206727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、次の2点を研究目的とする。(1)1980年代から今日に至る「知識基盤社会」における社会的な大転換の中に国語科の諸課題を位置づけ、国語教育に生じていた転換の意味を明らかにすること。(2)それを踏まえ、「言語活動」の意味を問い直し、その指導のあり方を、学習指導要領の分析をもとに提案するとともに、教員養成スタンダード等と連動させた教員養成・研修のあり方を提案すること。

研究成果の概要(英文)：This study, and research purposes the following two points.(1)positioned the challenges of language arts in the social transformation of the "knowledge-based society", to clarify the meaning of the transformation that has occurred in the national language education.(2)Based on it, to validate the significance of the "language activities", that we propose the teaching methods, we propose the way of teacher training that was allowed to work with the teacher training standards and the like.

研究分野：教科教育

キーワード：知識基盤社会 言語活動 学習指導要領 教員養成スタンダード

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、筆者が委員として参加してきた「中央教育審議会」(初等中等分科会)(平成19~21年)、「全国的な学力調査の在り方等の検討に関する専門家会議」(平成22~23年)、「言語活動充実に関する指導資料の作成に関する協力者会議」(平成22~)、 「横浜市教育課程研究委員会」(平成21~22年度)等での議論等から課題意識を深めた問題である。以下、その点から説明する。

中教審等で前提とされる「知識基盤社会」(knowledge-based society)の語が最初に用いられたとされる同答申「我が国の高等教育の将来像」(2005.1)では、その特質を、知識のグローバル化、知識の競争と絶え間ない技術革新、幅広い知識と柔軟な思考力等の重要性、性別や年齢を問わない社会参画などと説明する。そしてこれが中教審答申(2008.1)及び新学習指導要領(2008.3)等に継承され、新しい教育課程を支える基本認識となった。

しかしながらこの語は、戦後の学習指導要領の基底にあった「民主主義社会」構築等の価値的理念は含まれておらず、言わば進行しつつある事態、状況を素描した感が強い。極端に言えば、如何なる社会が到来するのか見通せず、ただ情報技術に支えられたグローバル化と競争が激化する社会をそう名づけただけと言ってよい。そしてそれが圧倒的な現実であるがゆえに、そこから脱落しないことにはばかり目が奪われ、「知識基盤社会」のもつ多相性や、そこから生じた問題などについては、部分的・現象的な指摘はあるが、十分な議論がなされたとは言い難い。とりわけ国語科は、人間の思考や感情に深く根を下ろす言語の教育を担う教科であってみれば、より深層において丁寧な議論をすべきであった。それが本研究の課題意識の出発点であった。

## 2. 研究の目的

上記の観点から、本研究は、大きく次の2点を研究目的として行った。本研究は、大きく次の2点を研究目的とした。

(1) 1980年前後から「知識基盤社会」と言われる今日に至るまでの社会上・思想上の大転換の中に国語科教育の諸問題を置き直すことで、国語科教育に生じていた転換の意味を明らかにする。

(2) それを踏まえ、「言語活動」の意味を問い直し、その指導の在り方を筆者が開発中の方法(指導事項の「分割」「分析」、及び発問の構造化など)と「横浜スタンダード」(横国大)や「教職員キャリアステージにおける人材育成指標」(横浜市教委)を連動させた教員養成・教員研修に資する学習プログラムとして提示する。

## 3. 研究の方法

(1) 1980年代以降の種々の言説の中から、国語教育の大転換を見つめ直すために、文献資料の調査を行う。

(2) 上記を踏まえつつ、「教員養成スタンダード」(「横浜スタンダード」改訂版)や横浜市教委の「教職員キャリアステージにおける人材育成指標」との連動も視野に入れて、指導事項の「分割」と「分析」による言語活動の授業デザインを各種講演、研修の場で検証し、その成果を常に現場に還元しつつ、世に問う。

## 4. 研究成果

(1) そこでまず「知識基盤社会」の多相性を考えるために、その源を探ってみる。するとそこで行き当たるのは、臨時教育審議会(1984~1987年)、中でも「個性尊重、生涯学習、変化への対応」が強調された第4次答申(1987年)である。急速に経済のグローバル化と規制緩和が進み、日本全体が豊かさを享受する中で、社会構造が大きな転換を遂げようとする時代下での状況認識であった。そしてこうした社会構造の転換が思想及び教育上にも大きな転換をもたらしたとする指摘は多い。例えば、見田宗介『現代日本の

感覚と思想』(講談社 1995.4)、刈谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』(中央公論社 1995.6)、大澤真幸『戦後の思想空間』(筑摩書房 1998.7)、三浦雅士『青春の終焉』(講談社 2001.9)などを挙げる事ができる。さらにこの転換は規範の内面化による「規律訓練型権力」からアーキ・テクチャによる「環境管理型権力」へとという権力の在り方の転換としても説明される(東浩紀『情報環境論集』講談社 2007.8)。所謂「大きな物語」の終焉(リオタール『ポスト・モダンの条件』水声社 1986.5)或いは「思想」の終焉と呼ぶにふさわしいが、その到達点が、情報化された消費化社会において大衆が自己の欲求を肥大化させた「動物化したポストモダン」(東浩紀『動物化したポストモダン』講談社 2001.11)と呼ばれる今日の状況であり、これらが「知識基盤社会」の深層に幾重にも横たわっているものと思われる。

(2)ではそこから生じた問題とは何であったのか。当然、種々のことが考えられるが、教育に携わる者として特に注目したいのは次の点である。それは情報化と消費化社会が進む過程で、人々は欲求を簡単に満たされるようになり、欠乏や他者を媒介に構築されてきた「自由」及び「個人」の観念が急速に溶解して失われ、それが「公共」の揺らぎや、若者たちの学習に対する意欲の衰退の一因となっているという問題である(刈谷剛彦・西研『考えあう技術』筑摩書房 2005.3、竹田清嗣『中学生からの哲学「超」入門』筑摩書房 2009.7、拙稿「『自由』及び『個人』について」教育デザインセンター編『教育デザイン研究』2010.3)。

こうした社会的背景の中で、学習者の種々の課題(いじめ、不登校、コミュニケーション不全、学力不振、発達障害な

ど)や保護者のモンスター化などの傾向が生じてきており、「生きる力」や「伝え合う力」などの教育理念や「言語活動の充実」、さらには「生涯に渡って学び続ける教員像」が求められるようになってきていると思われる。

(3)ではこのような社会上思想上の大転換の中に国語科の種々の問題を置き直してみたとき、それらはどのように見えてくるのか。管見では、榎井英人『「国語力」観の変遷』(溪水社 2006.3)などが視野を広げた議論を試みようとしているが、基本的には国語科や教育論の枠組みを出していない。これに対し、拙稿「戦後民間教育運動と国語科教育研究 - 「青春」としての民間教育運動から「若者文化」としての民間教育運動へ - 」(全国大学国語教育学会編『国語科教育』第 66 集 2009.9)は、社会上思想上の転換に着目しているが、それは 1970 年代前後における民間教育団体の運動体としての転換に焦点を当てているため、部分的な指摘にとどまっている。そこで、以上を念頭に、本研究が課題とした論点を取り上げる。

(4)まず、ある種の規範の内面化を図ってきたそれまでの文学教育に対するアンチテーゼとして、1980 年代に登場した読者論や分析批評は、一見対立的に見えて、実は規範の内面化による「規律訓練型権力」の衰退という社会上の転換の一つの現れであったと見ることが出来る点。主題指導の衰退もこれに連動する。また読者論等の登場以降は、読みにおける「自己」の尊重が常識化し、時に「自己」に閉じこもる読みを無条件に許容することもあったが、それは他者を媒介に構成される「自由」及び「個人」の観念の溶解と表裏の関係にあった。さらに 1980 年代以降、一貫して危機が叫ばれているコミュニケーション能力

や読書意欲の衰退なども過剰なまでの「自己」尊重＝「自己」偏重と連動する現象ではなかったか。これらは、近代という大きな物語が崩壊していく過程と連動し、学校という場を相対化し、たとえば学習者が抱える多様な課題、あるいは保護者のモンスター化現象などと強く結びついている。保護者の多くは、1980年代以降の教育を受けてきた世代であることも忘れてはならない。

(5)そして今日、アクティブ・ラーニングの必要性が叫ばれる状況下において、「言語活動の充実」は引き続き大きな課題として我々の前にある。むしろ「言語活動」は重要だが、しかし「自由」や「個人」の観念が衰弱した中で、無反省にそれを強調すれば、「知識基盤社会」というグローバルな競争社会に付いていくことだけに眼が奪われ、「言語活動」は単なる「価値追随」のための道具に墮する危険がある。たとえば効率的・効果的な文書作り、プレゼンテーションの仕方などはその典型と言える。たんなる言語活動の仕方の学習は新たな価値創造にはつながらない。

そのためにも、言語活動自体が、子供たちにとってどのような意味があるのかを考えつつ、授業づくりを行っていかねばならない。そうした観点から、国語を例に考えれば、指導事項の分割と分析という方法をもとに、何を学ばせるのか、その意味はどこにあるのか、という観点から学習の目標と内容の具体化を図る必要がある。そしてそれを教員養成や育成の中で、スタンダード(人材育成指標)などと関連づけつつ、教師を目指す者、また教師となった者が教職というものを自覚的に、かつ具体的に、自己の力を反省的に振り返りつつ学び続けることが必要になる。

(6)なお本研究期間の間に、筆者が学部長となったため、学部をリードして、関連する以下の事業をとりまとめて公表してきた。す

なわち、小学校での実習を念頭においた横浜スタンダード(教育GP)の改訂版である小中学校併用の「教員養成スタンダード」、それを元に、横浜市教育委員会と連携して作成した「教育実習ハンドブック」。いずれも元の版が大部で煩雑であったものを簡素化し、実用性の高いものとしつつ、平成28年度から活用している。また平成29年度設置予定の本学教職大学院(教育学研究科高度教職実践専攻)生用の「横浜国立大学教員養成・育成スタンダード」、さらに中教審においてその必要性が求められた教員育成指標である、県内教育委員会、校長会と共同で作成した教員育成指標「学び続ける教師のために～神奈川県教員スタンダード～」なども、先のスタンダードと関連させつつ作成し公表した。これらは県内全域に配布され、教育実習や教員育成の場で活用されており、他県、他大学からも求められており、教育人間科学部附属教育デザインセンターのホームページからダウンロードできるようにしている。

<http://www.edu-design.ynu.ac.jp/standard/>

これらの研究成果は、アクティブ・ラーニングの必要性が説かれる今日の状況において、その歴史的意味を考える上でも、また授業実践の具体化を図る上でも、教員の養成・育成の観点から一定の意義ある研究になったものと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7件)

高木まさき「グローバル社会で求められる国語の力」月刊国語教育研究、依頼論文、521、2015、pp.2-3

高木まさき「横浜国立大学教員養成スタンダードとカリキュラム等の構造化について」横浜国大国語教育研究、査読無し、2015、pp.56-61

高木まさき「多様化するメディア環境の中での『文字・漢字』指導の課題」月刊

国語教育研究、依頼論文、2014、 504、  
pp.28-31

高木まさき 「『手続き的な操作』を観点  
とした学力調査問題の分析」横浜国大  
国語研究、依頼論文、2014、 32、pp.18  
- 26

高木まさき 「『知識基盤社会』の三つの  
側面から授業改善の視点を考える」産業  
と教育、依頼論文、2013、 729、pp.2-7

高木まさき 「新聞で育まれる言葉の力  
N I Eを広げるために今考えること」  
新聞研究、依頼論文、 746、2013、  
pp.56-60

高木まさき 「他者との関係性を回復する  
場に 新学習指導要領の意義と新聞の力  
」新聞研究、依頼論文、 718、2011、  
pp.36-39

〔学会発表〕（計 5 件）

高木まさき 基調講演「『考える力』を  
育むためには、何が大切か」ことばと学  
びをひらく会、第 9 回研究大会（文部科  
学省後援）、2015

高木まさき 基調講演「『なぜ』を大切  
にする国語の授業」ことばと学びをひら  
く会、第 8 回研究大会（文部科学省後援）、  
2014

高木まさき 基調講演「私たちは、いま、  
どこに立っているのか 国語科における  
言語活動の授業づくりのために」こと  
ばと学びをひらく会、第 7 回研究大会（文  
部科学省後援）、2013

高木まさき 基調講演「ことばと出会う  
こと、ことばの学びをデザインするとい  
うこと」ことばと学びをひらく会、第 6  
回研究大会（文部科学省後援）、2012

高木まさき 基調講演「未来を切り拓く  
ことばの力」ことばと学びをひらく会、  
第 5 回研究大会（文部科学省後援）、2011

〔図書〕（計 12 件）

高木まさき 他 横浜国立大学教育人間  
科学部、文部科学省特別経費（プロジェ  
クト分） 高度な専門職業人の要請や専  
門教育機能の充実 教育デザインセンタ  
ーをハブとした都市型総合大学における  
教員養成システムの構築（平成 27 年度  
（5 年次）報告書、2016、79

高木まさき 他、学芸図書、国語教育研  
究手法の開発、2015、70

高木まさき 他、明治図書、国語科重要  
用語事典、2015、279

高木まさき 他、文部科学省、学びのイ  
ノベーション事業実証研究報告書、2014、  
327

高木まさき 他、ミネルヴァ書房、はじ  
めて学ぶ 学校教育と新聞活用 考え方  
から実践方法までの基礎知識、2013、206

高木まさき 他、学芸図書、国語科教育  
学研究の成果と展望、2013、574

高木まさき、教育開発研究所、国語科に  
おける言語活動の授業づくり入門、2013、  
198

高木まさき 他、共同出版、教科教育の  
理論と授業 人文編 2012、315

高木まさき 他、東京都教育委員会、東  
京都道徳教育教材集、小学校 1、2 年版、  
3、4 年版、5、6 年版、2012、各 118、  
134、144

高木まさき 他、東京都教育委員会、東  
京都道徳教育教材集、中学校版、2012、  
170

高木まさき 他、文部科学省、言語活動  
の充実に関する指導事例～思考力、判断  
力、表現力等の育成に向けて～【高等学  
校版】2012、207（ダウンロード版）現  
在は、教育出版から書籍として刊行。  
2014、218

高木まさき 他、文部科学省、言語活動  
の充実に関する指導事例～思考力、判断

力、表現力等の育成に向けて～【中学校版】2011、195（ダウンロード版）

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menus/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/05/30/1306108.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menus/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/05/30/1306108.pdf)

〔その他〕

ホームページ等

横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター（上記の3つのスタンダード）：

「教員養成スタンダード」、「横浜国立大学教員養成・育成スタンダード」、「学び続ける教師のために～神奈川県教員スタンダード～」

<http://www.edu-design.ynu.ac.jp/standard/>

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

高木 まさき（TAKAGI, Masaki）

横浜国立大・学教育人間科学部・教授

研究者番号：40206727